

## コリント人への第一の手紙

## 第一章 神の御旨により召されてキリスト・

イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、ニコリントにある神の教会、すなわち、わたしたちの主イエス・キリストの御名を至る所で呼び求めているすべての人々と共に、キリスト・イエスにあつてきよめられ、聖徒として召されたかたがたへ。このキリストは、わたしたちの主であり、また彼らの主であられる。

わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

わたしは、あなたがたがキリスト・イエスにあつて与えられた神の恵みを思つて、いつも神に感謝している。あなたがたはキリストにあつて、すべてのことに、キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして、あなたがたは恵みの賜物に、いささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいる。主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にして下さるであらう。神は真実なかたである。あなたがた

は神によつて召され、御子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに、はいらせていただいたのである。

さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によつて、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにし、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになつて、堅く結び合つていてほしい。二わたしの兄弟たちよ。実は、クロエの家の者たちから、あなたがたの間に争いがあると聞かされている。三はつきり言う、あなたがたがそれぞれ、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケバに」「わたしはキリストに」と言い合つてゐることである。四キリストは、いくつにも分けられたのか。パウロは、あなたがたのために十字架につけられたことがあるのか。それとも、あなたがたは、パウロの名によつてバプテスマを受けたのか。五わたしは感謝しているが、クリスボとガイオ以外には、あなたがたのうちのだれにも、バプテスマを授けたことがない。六それはあなたがたがわたしの名によつてバプテスマを受けたのだと、だれにも言われることのないためである。七もつとも、ステパナの家の者たちには、バプテスマを授けたことがある。しかし、そのほかには、だれにも授けた覚えがない。八いつたい、キリストがわたしをつかわされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を宣べ伝えるためであり、しかも知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであつた。それは、

キリストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである。

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。一九すなわち、聖書に、

「わたしは知者の知恵を滅ぼし、

賢い者の賢さをむなしのものにする」

と書いてある。二〇知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。三この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にならなっている。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである。三三ユダヤ人はしるしを請い、ギリシヤ人は知恵を求める。三三しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、三四召された者自身にとって、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。三五神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである。

二六兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。二七それなのに神は、知者はずかしめるために、こ

の世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選び、二八有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。二九それは、どんな人間でも、神のみまえに誇ることがないためである。三〇あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。三一それは、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりである。

## 第二章

二兄弟たちよ。

わたしもまた、あなたがたの所に行つたとき、神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。三二なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知らない、と、決心したからである。三三わたしがあなたがたの所に行つた時には、弱くかつ恐れ、ひどく不安であつた。

四そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によつたのである。五それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであつた。

六しかしわたしたちは、円熟している者の間では、知恵を語る。この知恵は、この世の者の知恵ではなく、この世の滅び行く支配者たちの知恵でもない。七むしろ、

わたしたちが語るのには、隠された奥義としての神の知恵である。それは神が、わたしたちの受ける栄光のために、世の始まらぬ先から、あらかじめ定めておかれたものである。この世の支配者たちのうちで、この知恵を知っていた者は、ひとりもいなかった。もし知っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったであろう。しかし、聖書に書いてあるとおり、

「目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、

人の心に思い浮びもしなかったことを、

神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」

のである。そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。二といった、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていたようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。二とところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。三この賜物について語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである。四生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解する

ことができない。五しかし、霊の人は、すべてのものを判断するが、自分自身はだれからも判断されることはない。六だれが主の思いを知って、彼を教えることができるか。しかし、わたしたちはキリストの思いを持っている。

### 第三章

一兄弟たちよ。わたしはあなたがたに

は、霊の人に対するように話すことができず、むしろ、肉に属する者、すなわち、キリストにある幼な子に話すように話した。二あなたがたに乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。食べる力が、まだあなたがたになかったからである。今になってもその力がない。三あなたがたはまだ、肉の人だからである。あなたがたの間に、ねたみや争いがあるのは、あなたがたが肉の人であって、普通の人間のように歩いているためではないか。四すなわち、ある人は「わたしはパウロに」と言い、ほかの人は「わたしはアポロに」と言っているようでは、あなたがたは普通の人間ではないか。五アポロは、いったい、何者か。また、パウロは何者か。あなたがたを信仰に導いた人にすぎない。しかもそれぞれ、主から与えられた分に応じて仕えているのである。六わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。七だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである。八植える者と水をそそぐ者とは一つであって、そ



れぞれその働きに応じて報酬を得るであろう。九 わたしたちは神の同労者である。あなたがたは神の畑であり、神の建物である。

一〇 神から賜わった恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういふふうに建てるか、それぞれ気をつけるがよい。二 なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。

三 この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、四 それぞれの仕事は、はっきりとわかつてくる。すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火は、それぞれの仕事か、どんなものであるかを、ためすであろう。五 もしある人の建てた仕事か、そのまま残れば、その人は報酬を受けるが、六 その仕事か、焼けてしまえば、損失を被るであらう。しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、救われるであらう。

二六 あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。二七 もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであらう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。

二八 だれも自分を欺いてはならない。もしあなたがたの

うちに、自分がこの世の知者だと思ふ人がいるなら、その人は知者になるために愚かになるがよい。一九 なぜなら、この世の知恵は、神の前では愚かなものだからである。「神は、知者たちをその悪知恵によって捕える」と書いてあり、二〇 更にまた、「主は、知者たちの論議のむなしきことをご存じである」と書いてある。二一 だから、だれも人間を誇つてはいけな。すべては、あなたがたのものなのである。二二 バウロも、アポロも、ケバも、世界も、生も、死も、現在のものも、将来のものも、ことごとく、あなたがたのものである。二三 そして、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものである。

第四章 「このようなわけだから、人はわたしたちを、キリストに仕える者、神の奥義を管理している者、と見るがよい。二 この場合、管理者に要求されているのは、忠実であることである。三 わたしはあなたがたにさばかれたり、人間の裁判にかけられたりしても、なんら意に介しない。いや、わたしは自分をさばくこともしない。四 わたしは自ら省みて、なんらやましいことはないが、それで義とされているわけではない。わたしをさばくかたは、主である。五 だから、主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけな。主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであらう。その時には、神からそれぞれはまれを受けるであらう。

六兄弟たちよ。これらのことをわたし自身とアポロとに当てはめて言つて聞かせたが、それはあなたがたが、わたしたちを例にとつて、「しるされてゐる定めを越えないう」ことを学び、ひとりの人をあがめ、ほかの人を見さげて高ぶることのないためである。七いつたい、あなたを偉くしているのは、だれなのか。あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないもののように誇るのか。八あなたがたは、すでに満腹しているのだ。すでに富み榮えているのだ。わたしたちを差しおいて、王になっているのだ。ああ、王になつていてくれたらと思う。そうであつたなら、わたしたちも、あなたがたと共に王になれたであらう。九わたしはこう考える。神はわたしたち使徒を死刑囚のように、最後に出場する者として引き出し、こうしてわたしたちは、全世界に、天使にも人々にも見せ物にされたのだ。一〇わたしたちはキリストのゆゑに愚かな者となり、あなたがたはキリストにあつて賢い者となつてゐる。わたしたちは弱いが、あなたがたは強い。あなたがたは尊ばれ、わたしたちは卑しめられてゐる。二今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、三苦勞して自分の手で働いてゐる。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍び、四ののしられては優しい言葉をかけてゐる。わたしたちは今に至るまで、この世のちりのように、人間

のくずのようにされている。一四わたしがこのようなくことを書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、むしろ、わたしの愛児としてさとすためである。一五たといあなたがたに、キリストにある養育掛が一人あつたとしても、父が多くあるのではない。キリスト・イエスにあつて、福音によりあなたがたを生んだのは、わたしなのである。一六そこで、あなたがたに勧める。わたしにならう者となりなさい。一七このことのために、わたしは主にあつて愛する忠実なわたしの子テモテを、あなたがたの所につかわした。彼は、キリスト・イエスにおけるわたしの生活のしかたを、わたしが至る所の教会で教へてゐるとおりに、あなたがたに思い起させてくれるであらう。一八しかしある人々は、わたしがあなたがたの所に來ることはあるまいとみて、高ぶつてゐるというのである。一九しかし主のみこころであれば、わたしはすぐにでもあなたがたの所に行つて、高ぶつてゐる者たちの言葉ではなく、その力を見せてもらおう。二〇神の国は言葉ではなく、力である。二一あなたがたは、どちらを望むのか。わたしがむちをもつて、あなたがたの所に行くことか、それとも、愛と柔和な心をもつて行くことであるか。

第五章 一現に聞くとおるところによると、あなたがたの間に不品行な者があり、しかもその不品行は、異邦人の間にもないほどのもので、ある人がその父の妻と一

緒に住んでいふことである。二それなのに、なおあなたがたは高ぶっている。むしろ、そんな行いをしてゐる者が、あなたがたの中から除かれねばならないことを思って、悲しむべきではないか。三しかし、わたし自身としては、からだは離れていても、霊では一緒にいて、その場にゐる者のように、そんな行いをした者を、すでにさばいてしまっている。四すなわち、主イエスの名によつて、あなたがたもわたしの霊と共に、わたしたちの主イエスの権威のもとに集まつて、五彼の肉が滅ぼされても、その霊が主のさばきの日に救われるように、彼をサタンに引き渡してしまつたのである。六あなたがたが誇っているのは、よろしくない。あなたがたは、少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか。七新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたは、事実パン種のな者なのだから。わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ。八ゆえに、わたしたちは、古いパン種や、また悪意と邪惡とのパン種を用いずに、パン種のはいつていない純粹で眞実なパンをもって、祭をしようではないか。

九わたしは前の手紙で、不品行な者たちと交際してはいけなと書いたが、一〇それは、この世の不品行な者、食欲な者、略奪をする者、偶像礼拝をする者などと全然交際してはいけなと、言つたのではない。もしそうだと

としたら、あなたがたはこの世から出て行かねばならないことになる。一一しかし、わたしは実際に書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、不品行な者、食欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば、そんな人と交際をしてはいけな、食事を共にしてもいけな、ということであつた。三外の人たちをさばくのは、わたしのすることであらうか。あなたがたのさばくべき者は、内の人たちではないか。外の人たちは、神がさばくのである。三その悪人を、あなたがたの中から除いてしまいなさい。

第六章 一あなたがたの中のひとりが、仲間の者と何か争ひを起した場合、それを聖徒に訴えないで、正しくない者に訴へ出るようなことをするのか。二それとも、聖徒は世をさばくものであることを、あなたがたは知らないのか。そして、世があなたがたによつてさばかれるべきであるのに、きわめて小さい事件でもさばく力がないのか。三あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使をささばく者である。ましてこの世の事件などは、いうまでもないではないか。四それなのに、この世の事件が起ると、教会で軽んじられてゐる人たちが、裁判の席につかせるのか。五わたしがこつ言うのは、あなたがたをはずかしめるためである。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争ひを仲裁することができ、ほどの知者は、ひとりもないのか。六しかるに、兄弟が



兄弟を訴え、しかもそれを不信者の前に持ち出すのか。七そもそも、互に訴え合うこと自体が、すでにあなたがたの敗北なのだ。なぜ、むしろ不義を受けないのか。なぜ、むしろだまされていないのか。八しかるに、あなたがたは不義を働き、だまし取り、しかも兄弟に対してそうしているのである。九それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのである。知らないのか。まぢがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、一貪欲な者、酒に酔う者、そして、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことにはないのである。二あなたがたの中には、以前はそんな人もいた。しかし、あなたがたは、主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、きよめられ、義とされたのである。

三すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配されることはない。三食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼすであろう。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためである。四そして、神は主をよみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。五あなたがたは自分のからだをキリストの肢体であることを、知らないのか。それなのに、キリスト

の肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていいない。六それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。七ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。八しかし主につく者は、主と一つの霊になるのである。九不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。一あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。二あなたがたは、代価を払って買ったのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。

## 第七章

一さて、あなたがたが書いてよこした事について答えると、男子は婦人にふれないがよい。二しかし、不品行に陥ることのないために、男子はそれぞれ自分の妻を持ち、婦人もそれぞれ自分の夫を持つがよい。三夫は妻にその分を果し、妻も同様に夫にその分を果すべきである。四妻は自分のからだを自由にすることとはできない。それができるのは夫である。夫も同様に自分のからだを自由にすることはできない。それができるのは妻である。五互に拒んではいけない。ただし、合意の上で祈に専心するために、しばらく相別れ、それからまた一緒にいることは、さしつかえない。そうでない

と、自制力のないのに乗じて、サタンがあなたがたを誘惑するかも知れない。六以上のことは、譲歩のつもりで言うのであって、命令するのではない。七わたしとしては、みんなの者がわたし自身のようになつてほしい。しかし、ひとりびとり神からそれぞれの賜物をいただいて、ある人はこうしており、他の人はそうしている。八次に、未婚者たちとやもめたちとに言うが、わたしのように、ひとりでおれば、それがいちばんよい。九しかし、もし自制することができないなら、結婚するがよい。情の燃えるよりは、結婚する方が、よいからである。一〇更に、結婚している者たちに命じる。命じるのは、わたしではなく主であるが、妻は夫から別れてはいけない。二（しかし、万一別れているなら、結婚しないでいるか、それとも夫と和解するかしなさい）。また夫も妻と離婚してはならない。三そのほかの人々に言う。これを言うのは、主ではなく、わたしである。ある兄弟に不信者の妻があり、そして共にいることを喜んでいる場合には、離婚してはいけない。三また、ある婦人の夫が不信者であり、そして共にいることを喜んでいる場合には、離婚してはいけない。四なぜなら、不信者の夫は妻によってきよめられており、また、不信者の妻も夫によってきよめられているからである。もしそうでなければ、あなたがたの子は汚れていることになるが、実際はきよいではないか。二五しかし、もし不信者の方が離れて行くのな

ら、離れるままにしておくがよい。兄弟も姉妹も、こうした場合には、束縛されてはいない。神は、あなたがたを平和に暮らせるために、召されたのである。二六なぜなら、妻よ、あなたが夫を救いうるかどうか、どうしてわかるか。また、夫よ、あなたも妻を救いうるかどうか、どうしてわかるか。

二七ただ、各自は、主から賜わった分に応じ、また神に召されたままの状態にしたがって、歩むべきである。これが、すべての教会に対してわたしの命じるところである。二八召されたとき割礼を受けていたら、その跡をなくそうとしないがよい。また、召されたとき割礼を受けていなかったら、割礼を受けようとしながよい。二九割礼があつてもなくても、それは問題ではない。大事なものは、ただ神の戒めを守ることである。三〇各自は、召されたままの状態にとどまっているべきである。三一召されたとき奴隷であつても、それを気にしないがよい。しかし、もし自由の身になりうるなら、むしろ自由になりなさい。三二主にあって召された奴隷は、主によって自由人とされた者であり、また、召された自由人はキリストの奴隷なのである。三三あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。人の奴隷となつてはいけない。三四兄弟たちよ。各自は、その召されたままの状態で、神のみまえに在るべきである。

三五おとめのことについては、わたしは主の命令を受け



てはいないが、主のあわれみにより信任を受けている者として、意見を述べよう。二六わたしはこう考える。現在迫っている危機のゆえに、人は現状にとどまっているがよい。二七もし妻に結ばれているなら、解こうとするな。妻に結ばれていないなら、妻を迎えようとするな。二八しかし、たとえ結婚しても、罪を犯すのではない。また、おとめが結婚しても、罪を犯すのではない。ただ、それらの人々はその身に苦難を受けるであらう。わたしは、あなたがたを、それからのがれさせたいのだ。二九兄弟たちよ。わたしの言うことを聞いてほしい。時は縮まっている。今からは妻のある者はないもののように、三〇泣く者は泣かないもののように、喜ぶ者は喜ばないもののように、買う者は持たないもののように、三世と交渉のある者は、それに深入りしないようにすべきである。なぜなら、この世の有様は過ぎ去るからである。三わたしはあなたがたが、思い煩わないようにしてほしい。未婚の男子は主のことに心をくばって、どうかして主を喜ばせようとするが、三結婚している男子はこの世のことに心をくばって、どうかして妻を喜ばせようとして、その心が分れるのである。三三未婚の婦人とおとめとは、主のことに心をくばって、身も魂もきよくなるうとするが、結婚した婦人はこの世のことに心をくばって、どうかして夫を喜ばせようとする。三五わたしがこう言うのは、あなたがたの利益になると思うからであって、あなたがた

を束縛するためではない。そうではなく、正しい生活を送って、余念なく主に奉仕させたいからである。

三八もしある人が、相手のおとめに対して、情熱をいだくようになった場合、それは適当でないと思いつつも、やむを得なければ、望みどおりにしてもよい。それは罪を犯すことではない。ふたりは結婚するがよい。三九しかし、彼が心の内で堅く決心していて、無理をしないで自分の思いを制することができ、その上で、相手のおとめをそのままにしておこうと、心の中で決めたなら、そうしてもよい。三八だから、相手のおとめと結婚することはさしつかえないが、結婚しない方がもっとよい。三九妻は夫が生きている間は、その夫につながれている。夫が死ねば、望む人と結婚してもさしつかえないが、それは主にある者に限る。四〇しかし、わたしの意見では、そのままでいたなら、もっと幸福である。わたしも神の霊を受けていると思う。

#### 第八章 偶像への供え物について答えると、

「わたしたちはみな知識を持っている」ことは、わかっている。しかし、知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める。二もし人が、自分は何か知っていると自負するならば、その人は、知らなければならぬほどの事すら、まだ知っていない。三しかし、人が神を愛するならば、その人は神に知られているのである。四さて、偶像への供え物を食べる

世に存在しないこと、また、唯一の神のほかには神がないことを、知っている。五 というのは、たとい神々といわれるものが、あるいは天に、あるいは地にあるとしても、そして、多くの神、多くの主があるようではあるが、わたしたちには、父なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出て、わたしたちもこの神に帰する。また、唯一の主イエス・キリストのみがいますのである。万物はこの主により、わたしたちもこの主によっている。しかし、この知識をすべての人が持っているのではない。ある人々は、偶像についての、これまでの習慣上、偶像への供え物として、それを食べるが、彼らの良心が、弱いために汚されるのである。食物は、わたしたちを神に導くものではない。食べなくても損はないし、食べても益にはならない。しかし、あなたがたのこの自由が、弱い者たちのつまずきにならないように、気をつけなさい。六 なぜなら、ある人が、知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのを見た場合、その人の良心が弱いために、それに「教育されて」、偶像への供え物を食べるようにならないだろうか。七 するとその弱い人は、あなたの知識によって滅びることになる。この弱い兄弟のためにも、キリストは死なれたのである。八 三のようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、その弱い良心を痛めるのは、キリストに対して罪を犯すことなのである。九 三だから、もし食物がわたしの兄弟をつ

まずかせるなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは永久に、断じて肉を食べることはしない。第十 九 章 一 わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。わたしたちの主イエスを見たではないか。あなたがたは、主にあるわたしの働きの実ではないか。二 わたしは、ほかの人に対しては使徒でないとしても、あなたがたには使徒である。あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。三 わたしの批判者たちに対する弁明は、これである。四 わたしたちには、飲み食いをする権利がないのか。五 わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちやケベのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。六 それとも、わたしとバルナバとだけには、労働をせずにいる権利がないのか。七 いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者があるうか。八 どう畑を作っていて、その実を食べない者があろうか。九 また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があろうか。一〇 わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。一 九すなわち、モーセの律法に、「穀物をこなししている牛に、くつこをかけてはならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだらうか。二 それとも、もっぱら、わたしたちのために言っておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこな

す者は、その分け前をもらう望みをもってこなすのである。二もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたがたから刈り取るのは、行き過ぎだろうか。三もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。三あなたがたは、宮仕えをしている人たちは宮から下がる物を食べ、祭壇に奉仕している人たちは祭壇の供え物の分け前にあずかることを、知らないのか。四それと同様に、主は、福音を宣べ伝えている者たちが福音によって生活すべきことを、定められたのである。

五しかしわたしは、これらの権利を一つも利用しなかった。また、自分がそうしてもらいたいから、このように書くのではない。そうされるよりは、死ぬ方がましである。わたしのこの誇は、何者にも奪い去られてはならないのだ。六わたしが福音を宣べ伝えても、それは誇にはならない。なぜなら、わたしは、そうせずにはおれないからである。もし福音を宣べ伝えなければ、わたしはわざわざいである。七進んでそれをすれば、報酬を受けるであろう。しかし、進んでしないとしても、それは、わたしにゆだねられた務なのである。八それでは、その報酬はなんであるか。福音を宣べ伝えるのにそれを無代

価で提供し、わたしが宣教師として持つ権利を利用しないことである。

九わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。一〇ユダヤ人には、ユダヤ人のようになった。ユダヤ人を得るためである。律法の下にある人には、わたし自身は律法の下にはないが、律法の下にある者のようになつた。律法の下にある人を得るためである。三律法のない人には——わたしは神の律法の外にあるのではなく、キリストの律法の中にあるのだが——律法のない人のようになつた。律法のない人を得るためである。三弱い人には弱い者になつた。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになつた。なんとかして幾人かを救うためである。三福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである。

四あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。五しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。六そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。七すなわち、自分のからだを打ちたた



いて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣傳伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない。

# 第一章

兄弟たちよ。このことを知らずにい

てもらいたくない。わたしたちの先祖はみな雲の下におり、みな海を通り、みな雲の中、海の中で、モーセにつくバプテスマを受けた。三また、みな同じ霊の食物を食べ、みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない。五しかし、彼らの中の大多数は、神のみどころにかなわなかったので、荒野で滅ぼされてしまった。

六これらの出来事は、わたしたちに対する警告であつて、彼らが悪をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためなのである。七だから、彼らの中のある者たちのように、偶像礼拝者になつてはならない。すなわち、「民は座して飲み食いをし、また立って踊り戯れた」と書いてある。八また、ある者たちがしたように、わたしたちは不品行をしてはならない。不品行をしたため倒された者が、一日に二万三千人もあつた。九また、ある者たちがしたように、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。一〇また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。二これらの事が彼らに起つたのは、他に対する警告とし

てであつて、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいゝるわたしたちに対する訓戒のためである。二三だから、立っていると考える者は、倒れないように気をつけるがよい。二四あなたがたの会つた試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。

一四それだから、愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。一五賢明なあなたがたに訴える。わたしの言うことを、自ら判断してみるがよい。一六わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかることではないか。わたしたちがさくパン、それはキリストのからだにあずかることではないか。二七パンが一つであるから、わたしたちは多くいても、一つのからだなのである。みんなの者が一つのパンを共にいただくからである。二八肉によるイスラエルを見るがよい。供え物を食べる人たちは、祭壇にあずかるのではないか。一九すると、なんと云つたらよい。偶像にささげる供え物は、何か意味があるのか。また、偶像は何かほんとうにあるものか。二〇そうではない。人々が供える物は、悪霊ども、すなわち、神ならぬ者に供えるのである。わたしは、あなたがたが悪霊の仲間になることを望まない。三主の杯と悪霊どもの杯とを、同時に飲むことはできない。主の食卓と悪霊ども

の食卓とに、同時にあずかることはできない。三それとも、わたしたちは主のねたみを起そうとするのか。わたしたちは、主よりも強いのだろうか。

三すべてのことは許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは許されている。しかし、すべてのことが人の徳を高めるのではない。二四だれでも、自分の益を求めないで、ほかの人の益を求めるべきである。二五すべて市場で売られている物は、いちいち良心に問うことをしないで、食べるがよい。二六地とそれに満ちている物とは、主のものだからである。二七もしあなたがたが、不信者のだれかに招かれて、そこに行こうと思う場合、自分の前に出される物はなんでも、いちいち良心に問うことをしないで、食べるがよい。二八しかし、だれかがあなたがたに、これはささげ物の肉だと言ったなら、それを知らせてくれた人のために、また良心のために、食べないがよい。二九良心と言ったのは、自分の良心ではなく、他人の良心のことである。なぜなら、わたしの自由が、どうして他人の良心によって左右されることがあるのか。三〇もしわたしが感謝して食べる場合、その感謝する物について、どうして人のそしりを受けるわけがあるのか。三一だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。三二ユダヤ人にもギリシヤ人にも神の教会にも、つまりきになつてはいけない。三三わたしもまた、何事にも

すべての人に喜ばれるように努め、多くの人が救われるために、自分の益ではなく彼らの益を求めている。

第一一章 わたしがキリストにならう者であるように、あなたがたもわたしにならう者になりなさい。

二あなたがたが、何かにつけてわたしを覚えていて、あなたがたに伝えたとおりに言伝えを守っているので、わたしは満足に思う。三しかし、あなたがたに知っていてもらいたい。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神である。四祈をしたり預言をしたりする時、かしらに物をかぶる男は、そのかしらをはずかしめる者である。五祈をしたそのかしらをはずかしめる者である。それは、髪をそったのとまったく同じだからである。六もし女がおおいをかけないなら、髪を切ってしまうがよい。髪を切ったりそったりするのが、女にとって恥すべきことであるなら、おおいをかけるべきである。七男は、神のかたちであり栄光であるから、かしらに物をかぶるべきではない。女は、また男の栄光である。八なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たのだからである。九また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのである。一〇それだから、女は、かしらに權威のしるしをかぶるべきである。それは天使たちのためでもある。一一ただ、主にあつては、男なしには女はないし、

女なしには男はない。三それは、女が男から出たように、男もまた女から生れたからである。そして、すべてのものは神から出たのである。三あなたがた自身で判断してみることがよい。女がおおいをかげずに神に祈るのは、ふさわしいことだろうか。四自然そのものが教えているではないか。男に長い髪があれば彼の恥になり、五女に長い髪があれば彼女の光栄になるのである。長い髪はおおいの代りに女に与えられているものだからである。六しかし、だれかがそれに反対の意見を持っていても、そんな風習はわたしたちにはなく、神の諸教会にもない。

七ところで、次のことを命じるについては、あなたがたをほめるわけにはいかない。というのは、あなたがたの集まりが利益にならないで、かえって損失になっているからである。一八まず、あなたがたが教会に集まる時、お互いの間に分争があることを、わたしは耳にしており、そしていくぶんか、それを信じている。一九たしかに、あなたがたの中でほんとうの者が明らかにされるためには、分派もなければなるまい。二〇そこで、あなたがたと一緒に集まる時、主の晩餐を守ることができないでいる。三というの、食事の際、各自が自分の晩餐をかってに先に食べるので、飢えている人があるかと思えば、酔っている人がある始末である。三あなたがたには、飲み食いをする家がないのか。それとも、神の教会を軽んじ、貧しい人々をはずかしめるのか。わたしはあなたが

たに對して、なんと言おうか。あなたがたを、ほめようか。この事では、ほめるわけにはいかない。三わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。二五食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい」。二六だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。二七だから、ふさわしくないままにパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだを犯すのである。二八だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである。二九主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによつて自分にさばきを招くからである。三〇あなたがたの中に、弱い者や病人が大ぜいおり、また眠った者も少なくないのは、そのためである。三十一かし、自分をよくわきまえておくならば、わたしたちはさばかれることはないであろう。三十二しかし、さばかれるとすれば、それは、この世と共に罪に定められないために、主の懲らしめを受けることなのである。三三それだから、兄弟たちよ。食事のために集まる時には、互に待ち



合わせなさい。三もし空腹であつたら、さばきを受けに集まることにならないため、家で食べるがよい。そのほかの事は、わたしが行った時に、定めることにしよう。

# 第二章 兄弟たちよ。霊の賜物については、

次のことを知らずにいてもいたくない。二あなたがたがまだ異邦人であつた時、誘われるまま、物の言えない偶像のところに行かれて行ったことは、あなたがたの承知しているとおりでである。三そこで、あなたがたに言うておくが、神の霊によって語る者はだれも「イエスはのろわれよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」と言うことができない。

四霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。五務は種々あるが、主は同じである。六働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。七各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体に益になるためである。八すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、九またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていのちの賜物、十またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。二すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであつて、御霊は思ひのままに、それ

らを各自に分け与えられるのである。三からだが一つであつても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあつても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である。四なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである。五実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。六もし足が、わたしは手ではないから、からだに属してはいないと言つても、それで、からだに属さないわけではない。七また、もし耳が、わたしは目ではないから、からだに属してはいないと言つても、それで、からだに属さないわけではない。八もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとすれば、どこでかくのか。九そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである。一〇もし、すべてのものが一つの肢体なら、どこにからだがあるのか。二〇ところが実際、肢体は多くあるが、からだは一つなのである。三目は手にむかつて、「おまえはいらない」とは言えず、また頭は足にむかつて、「おまえはいらない」とも言えない。三三そうではなく、むしろ、からだのうちで他よりも弱く見える肢体が、かえつて必要なのであり、三三からだのうちで、他よりも見劣りがすると思えるところに、ものを着せていっそう見よくす

る。麗しくない部分はいっそう麗しくするが、二麗しい部分はその必要がない。神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。三それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢體が互にいたわり合うためなのである。四もし一つの肢體が悩めば、ほかの肢體もみな共に悩み、一つの肢體が尊ばれると、ほかの肢體もみな共に喜ぶ。五あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢體である。六そして、神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた。七みんなが使徒だろうか。みんなが預言者だろうか。みんなが教師だろうか。みんなが力あるわざを行う者だろうか。三〇みんながいやしの賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか。三二だが、あなたがたは、更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたに示そう。

第一三章 一たといわしたが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい饒鉢と同じである。二たといまた、わたしが預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い

信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。三たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。

四愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、五不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。六不義を喜ばないで真理を喜ぶ。七そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。八愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。九なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。一〇全きものが来る時には、部分的なものはすたれる。二わたしたちが幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなとなった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった。三わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。四このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。

# 第一 四章 一愛を追い求めなさい。また、霊の賜

物を、ことに預言することを、熱心に求めなさい。二異言を語る者は、人にむかつて語るのではなく、神にむかつて語るものである。それはだれにもわからない。彼はただ、霊によって奥義を語っているだけである。三しかし預言をする者は、人に語ってその徳を高め、彼を励まし、慰めるのである。四異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は教会の徳を高める。五わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい。教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまさっている。

六だから、兄弟たちよ。たといわたしがあなたがたの所に行つて異言を語るとしても、啓示か知識か預言か教かを語らなければ、あなたがたに、なんの役に立つたろうか。七また、笛や立琴のような楽器でも、もしその音に変化がなければ、何を吹いているのか、弾いているのか、どうして知ることができようか。八また、もしラッパがはっきりした音を出さないなら、だれが戦鬨の準備をするだろうか。九それと同様に、もしあなたがたが異言ではっきりしない言葉を語れば、どうしてその語るこ

わからないなら、語っている人にとっては、わたしは異国人であり、語っている人も、わたしにとっては異国人である。三だから、あなたがたも、霊の賜物を熱心に求めている以上は、教会の徳を高めるために、それを豊かにいただくように励むがよい。

三このようなわけであるから、異言を語る者は、自分でそれを解くことができるように祈りなさい。四もしわたしが異言をもって祈るなら、わたしの霊は祈るが、知性は実を結ばないからである。五すると、どうしたらよいのか。わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう。六そうでないと、もしあなたが霊で祝福の言葉を唱えても、初心者の席にいる者は、あなたの感謝に対して、どうしてア amen と言えようか。あなたが何を言っているのか、彼には通じない。七感謝するのは結構だが、それで、ほかの人の徳を高めることにはならない。八わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れることを、神に感謝する。九しかし教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、ほかの人たちをも教えるために、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい。

二〇兄弟たちよ。物の考えかたでは、子供となつてはいけない。悪事については幼な子となるのはよいが、考えかたでは、おとなとなりなさい。二一律法にこう書いてある、「わたしは、異国の舌と異国のくちびるとで、この民



に語るが、それでも、彼らはわたしに耳を傾けない、と主が仰せになる」。三 このように、異言は信者のためではなく未信者のためのしるしであるが、預言は未信者のためではなく信者のためのしるしである。三もし全教会が一緒に集まって、全員が異言を語っているところに、初心者か不信者がはいってきたら、彼らはあなたがたを氣遣いだと言うだろう。四しかし、全員が預言をしているところに、不信者が初心者はいってきたら、彼の良心はみんなの者に責められ、みんなの者にさばかれ、三その心の秘密があらわれ、その結果、ひれ伏して神を拝み、「まことに、神があなたがたのうちにいます」と告白するに至るであらう。

二六すると、兄弟たちよ。どうしたらよいのか。あなたがたが一緒に集まる時、各自はさんびを歌い、教をなし、啓示を告げ、異言を語り、それを解くのであるが、すべては徳を高めるためにすべきである。二七もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである。二八もし解く者がいない時には、教会では黙っていて、自分に対したまは神に対して語っているべきである。二九預言をする者の場合にも、ふたりか三人かが語り、ほかの者はそれを吟味すべきである。三〇しかし、席にいる他の者が啓示を受けた場合には、初めの者は黙るがよい。三一あなたがたは、みんなが学びみんなが勧めを受けるために、ひとりずつ

残らず預言をすることができるのである。三二かつ、預言者の霊は預言者に服従するものである。三三神は無秩序の神ではなく、平和の神である。

聖徒たちのすべての教会で行われているように、三四人たちは教会では黙っていないなければならない。彼らは語ることが許されていない。だから、律法も命じているように、服従すべきである。三五もし何か学びたいことがあれば、家で自分の夫に尋ねるがよい。教会で語るのは、婦人にとっては恥すべきことである。三六それとも、神の言はあなたがたのところから出たのか。あるいは、あなたがただけにきたのか。

三七もしある人が、自分は預言者か霊の人であると思っているなら、わたしがあなたがたに書いていることは、主の命令だと認めるべきである。三八もしそれを無視する者があれば、その人もまた無視される。

三九わたしの兄弟たちよ。このようなわけだから、預言することを熱心に求めなさい。また、異言を語ることが妨げてはならない。四〇しかし、すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行うがよい。

第一 五章 「兄弟たちよ。わたしが以前あなたがたに伝えた福音、あなたがたが受けいれ、それによって立ってきたあの福音を、思い起してもらいたい。二もしあなたがたが、いたずらに信じないで、わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を固く守っておれば、この福音によっ

て救われるのである。三わたしは最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであつた。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、四そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえつたこと、五ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。六そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠つた者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。七そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、八そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。九實際わたしは、神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でいちばん小さい者であつて、使徒と呼ばれる値うちのない者である。一〇しかし、神の恵みによつて、わたしは今日あるを得ているのである。そして、わたしに賜つた神の恵みはむだにならず、むしろ、わたしは彼らの中のだれよりも多く働いてきた。しかしそれは、わたし自身ではなく、わたしと共にあつた神の恵みである。二とにかく、わたしにせよ彼らにせよ、そのように、わたしたちは宣べ伝えており、そのように、あなたがたは信じたのである。

三さて、キリストは死人の中からよみがえつたのだと宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死人の復活などはないと言っているのは、どうしたこと

か。三もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかつたであらう。四もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなししい。五すると、わたしたちは神にそむく偽証人にさえなるわけだ。なぜなら、万一人がよみがえらないとしたら、わたしたちは神が実際よみがえらせなかつたはずのキリストを、よみがえらせたと言つて、神に反するあかしを立てたことになるからである。六もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかつたであらう。七もしキリストがよみがえらなかつたとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになる。八そうだとすると、キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまつたのである。九もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあつて単なる望みをいだいていただけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。

一〇しかし事實、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえつたのである。三それは、死がひとりの人によつてきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によつてこなければならぬ。三アダムにあつてすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあつてすべての人が生かされるのである。三ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、

次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち、二四それから終末となつて、その時に、キリストはすべての君たち、すべての権威と権力とを打ち滅ぼして、国を父なる神に渡されるのである。二五なぜなら、キリストはあらゆる敵をその足もとに置く時までには、支配を続けることになつてゐるからである。二六最後の敵として滅ぼされるのが、死である。二七「神は万物を彼の足もとに従わせた」からである。ところが、万物を従わせたと言われる時、万物を従わせたかたがそれに含まれていないことは、明らかである。二八そして、万物が神に従う時には、御子自身もまた、万物を従わせたそのかたに従うであろう。それは、神がすべての者にあつて、すべてとなられるためである。

二九そうでないとすれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだらうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。三〇また、なんのために、わたしたちはいつも危険を冒してゐるのか。三一兄弟たちよ。わたしたちの主キリスト・イエスにあつて、わたしがあなたがつき持っている誇りにかけて言うが、わたしは日々死んでゐるのである。三二もし、わたしが人間の考へによつてエペソで戦つたとすれば、それはなんの役に立つのか。もし死人がよみがえらないのなら、「わたしたちは飲み食いしようではないか。あすもわからぬいのち

なのだ」。三三まちがつてはいけない。

三四「悪い交わりは、良いならわしをそこなう」。三五

目ざめて身を正し、罪を犯さないようにしなさい。あ

なたがたのうちには、神について無知な人々がいる。あ

なたがたをはずかしめるために、わたしはこう言うのだ。

三六しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、

死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。

三七おろかな人である。あなたのまくものは、死ななけ

れば、生かされないではないか。三八また、あなたのまく

のは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦で

あつても、ほかの種であつても、ただの種粒にすぎない。

三九ところが、神はみこころのままに、これにからだを与

え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えにな

る。四〇すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があ

り、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。四一

に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天

に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違つて

いる。四二日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光が

ある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。

四三死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまか

れ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、

栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いもの

のによみがえり、肉のからだでまかれ、霊のからだに

よみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊の



からだもあるわけである。四五聖書に「最初の人アダムは生きたものとなった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった。四六最初にあつたのは、霊のものではなく肉のものであつて、その後霊のものが来るのである。四七第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。四八この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天に属している人々は等しいのである。四九すなわち、わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであらう。

五〇兄弟たちよ。わたしはこの事を言っておく。肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない。五一ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラツパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。五二というのは、ラツパが響いて、死人は朽ちない者によりみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。五三なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。五四この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。

五五「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。」

死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。五六死のとげは罪である。罪の力は律法である。五七しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによつて、わたしたちに勝利を賜わたしたのである。五八だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあつては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである。

第一 六章 「聖徒たちへの献金については、わたしはガラテヤの諸教会に命じておいたが、あなたがたもそのとおりにしなさい。六一週の初めの日ごとに、あなたがたはそれぞれ、いくらでも収入に応じて手もとにくわえておき、わたしが着いた時になつて初めて集めることのないようになさい。六二わたしが到着したら、あなたがたが選んだ人々に手紙をつけ、あなたがたの贈り物を持たせて、エルサレムに送り出すことにしよう。六三もしわたしも行く方がよければ、一緒に行くことになる。六四わたしは、マケドニヤを通過してから、あなたがたのところに行くことになる。マケドニヤは通過するだけだが、六五あなたがたの所では、たぶん滞在するようになり、あるいは冬を過ごすかも知れない。そうなれば、わたしがどこへ行くにしても、あなたがたに送ってもらえるだろう。六六わたしは今、あなたがたに旅のついでに会うことは好まない。もし主のお許しがあれば、し

